

# 徳林寺史の研究

小 坂 雅 俊

## 第一章 徳林寺の由緒・沿革

### 第一節 徳林寺創建の由緒

大龍山徳林寺は、永仁二年（一二九四）に尾張国余野村に住む武士、小池与八郎貞宗が亡母追福の為に建立された寺である。建立当時は「空母山徳蓮寺」と称し、宗派は真言宗であった。残念ながらその当時の様子などを示す記録や位牌は現在残されておらず詳しい事は不明である。その後百七十余年の間、戦国の兵火などに幾度となく遭った徳蓮寺は寺閥も荒廃し、一時衰退してしまった。

文明元年（一四六九）大久地城（箭筈城）主であった織田遠江守広近公が衰退していた徳蓮寺を塔頭の龍福庵・全徳庵・宝光院・徳重庵の四カ寺と合わせて「大龍山徳林寺」と改称し、美濃岐阜の瑞龍寺より悟溪宗頼禅師を開山として招き再興した。

ここに記した以外に、徳林寺創建の由緒として「山姥物語」という伝説が語りつがれているが、これについては後

に伝説の章に記する事にしたい。

## 第二節 徳林寺の沿革

徳林寺の沿革をたどっていく上で、本来ならば徳蓮寺の時代から進めていくべきであるが、第一節でも述べたようにその当時の記録が全く残されていない為、徳林寺に改称してからの事について述べていく事にする。

織田広近公によって招かれた悟溪宗頓禪師は、法嗣の一人である寿岳宗彰禪師に徳林寺を創建開山として継承させ、自らは岐阜の瑞龍寺に住寺した。よって悟溪禪師は徳林寺における勧請開山となる。創建開山寿岳和尚の後を継いだのが第二世蘭室宗幡和尚である。この蘭室和尚の時、天正十二年（一五八四）に小牧長久手の合戦がおこり、その時に秀吉方の兵火によって殿堂及び四塔頭（龍福庵・全徳庵・宝光院・徳重庵）をことごとく焼失してしまった。その中であって古方丈と中門だけは幸いにも焼失を免れ、この二つは現在まで残されている。蘭室和尚は、この兵火の中にあって本尊の前で大喝一聲して何処ともなく寺を去り、言い伝えによれば美濃の伊木山中（現在の各務原市）に於て寂したとなっている。よって歴代住職の中で蘭室和尚のみ遷化の日が不明である。

蘭室和尚以後百五十余年の間、徳林寺は無住寺院として経過している。その間の慶長三年（一五九八）には、海甫智公和尚により塔頭であった全徳庵が再興されている。その後第三世として住寺したのが継山全初和尚である。継山和尚は享保年間（一七一六—一七三六）に、一宮笹野の妙光寺の石溪智頑和尚の法系を継承してきたが、この法系の源は寿岳宗彰禪師である為、蘭室和尚までの徳林寺の法系と変わりはない。このことにより継山和尚は徳林寺の中興開山となっており、寺門興隆の為に大変力を尽くしたといわれている。第四世大保元養和尚も同じく寺門興隆に力を尽くした。しかし、第五世椿叟全固和尚はそれまでの歴代和尚とは少々違っていた。椿叟和尚は稀なる酒豪であった。そして寺はだんだんと貧しくなっていく、遂にはその酒のために和尚自身の命までも亡くしてしまったのである。

第六世戒田辨珠和尚が住寺した時の徳林寺の貧しさは大変なものであったようだ。食事をするための茶碗や箸すら無かったという。そうした中で戒田和尚は寺門再興のためにひたすら托鉢に歩いたといわれ、その当時の姿を現在に伝えるものとして「戒田和尚托鉢の図」という一軸が残されている。

第七世琅山恵琳和尚、第八世堂應祖蘭和尚は共に寺門興隆に力を尽された。その当時の徳林寺は、田畑山林十三町歩余を持ち、年間に二百数十俵の年貢を収納していた。第六世の戒田和尚が住寺されたころからすると考えられないほど立派に徳林寺は甦っていた。

第九世龍源全珠和尚は、在職僅か十五年にして本堂・庫裡及び山門を建築された。なおこの庫裡は、犬山城主成瀬公所有の建物で武者所であった瑞泉寺山内臨溪院の庫裡を明治七年（一八七四）に、金三百九十円で購入し移築したものである。また山門は、明治九年（一八七六）に犬山城の第一黒門を金二十三円で購入し移築したものである。本堂は明治十三年（一八八〇）に完成している。

第十世浩道恵然和尚は、書院及び開山堂を新築された。また明治二十四年（一八九一）十月の濃尾大震災により諸堂が被害をうけ、翌二十五年三月に大修繕を行っている。

浩道和尚には五人の法嗣がおり、その内の一人大休愚底和尚は、塔頭であった全徳庵の第十世となり、明治三十四年（一九〇二）一月に徳林寺より全徳庵を独立させ、「福新山全徳寺」に改称している。これにより大休和尚は全徳寺の中興開山となっている。

第十一世大方玄海和尚の時、昭和十六年（一九四一）に太平洋戦争が始まった。幸にして戦火はまぬがれたが、軍によって梵鐘などを供出させられた。このような事は全国の他の寺院にも多くみられたことで、仏の鐘までも銃弾などにされたというのが戦争の悲しい現実である。昭和二十年（一九四五）十二月、敗戦に伴い行われた農地改革によって徳林寺は約十二町歩の田畑を政府に安価で買い上げられ、寺領は僅かな山林のみを残すだけに激減した。昭和二十三

年（一九四八）梵鐘が再鑄され鐘楼に鐘が甦った。それから十一年後の昭和三十四年（一九五九）九月、東海地方を襲った伊勢湾台風によつて徳林寺も鐘楼が倒壊するなどの被害を受けたが、五年後の昭和三十九年（一九六四）には新たな鐘楼が建立され現在の姿となっている。

第十二世瑞岩實穂和尚の代になり、昭和四十五年から四十九年（一九七〇～一九七四）にかけて昭和の大修繕が行われ、本堂及び庫裡の瓦葺き替えなどが行われた。またそれと同時に庭園（禅苑）が整備され、昭和四十七年（一九七二）に完成している。昭和六十一年（一九八六）には「慈母観音像」が建立され、同年三月十八日に開眼供養が行われ、以後毎年法要が行われるようになった。

昭和六十四年（一九八九）一月七日、昭和の時代に終りを告げ、世は平成の時代を迎えた。徳林寺も平成五年（一九九三）に創建七百年を迎え、記念事業として一切経を納める経蔵堂を新築し、開山堂・位牌堂を改築し、共に平成六年（一九九四）に完成している。平成七年（一九九五）十月には徳林寺創建七百年と、創建開山寿岳和尚五百年遠諱を記念して報恩授戒会が行われ、徳林寺も新たな時代へ一步を踏み出したのである。

## 第二章 徳林寺の開山・開基

### 第一節 徳林寺の開山

徳林寺の開山には、勧請開山悟溪宗頓禪師と創建開山寿岳宗彭禪師がいる。またこの二師の他に中興開山として継山全初和尚もいるが、ここでは勧請開山と創建開山について述べていくこととする。

#### （一）勧請開山—悟溪宗頓—

徳林寺勧請開山悟溪宗頓禪師は、妙心寺派の四派の一つ東海派の開祖である。

悟溪は、応永二十二年（一四一五）に尾張国丹羽郡山名村（現在の愛知県丹羽郡扶桑町山名）で生れた。幼い時より非凡な才能を見せていた悟溪を人々は小釈迦と呼んでいたといわれる。永享年間（一四二九～一四四一）悟溪は十七・八歳のころから、犬山の瑞泉寺及び京都の妙心寺において日峰宗舜について修行をし、更に美濃の汾陽寺で雲谷玄祥に、東濃可児の愚溪寺で義天玄詔、伊勢の大樹寺で桃隠玄朔と歴参して、最後は京都の龍安寺に於て雪江宗深について実証し印可状を得ている。

悟溪の歩んだこの修行歴参の道は、龍泉派の開祖である景川宗隆とほとんど同じであった。特に大樹寺の道場と龍安寺では兄弟弟子として両者相競って参禅に励んだものと思われる。年齢は悟溪の方が景川よりも三歳年上であったが、修行の上では景川を兄として慕っていた。後に景川が亡くなった時にはその死を悼んで、「洛陽城北 我と兄と憶昔えば同参して 句を屢評せしものよ」と詠んで自らは年長でありながら景川に兄事して修行に励んだことを懐かしく追憶している。

悟溪が雪江から印可状を受けたのは、景川が受けてから三年後のことであった。時に応仁元年（一四六七）六月、五十二歳のことである。その年京都では応仁の乱がおこり、師である雪江は一旦、丹波八木の龍興寺に避難した後、尾張犬山の瑞泉寺に入寺した。悟溪も瑞泉寺の山内に一庵（後の臥龍寺）を構えて悟後長養するとともに、戦乱で苦境にあつた雪江の近くで師の力となった。その当時の悟溪の逸話が残っているが、それは次のような話である。

「瑞泉寺の境内地は小高い山の上にあつて水に不自由であつたため、悟溪は庵後に独力で深井戸を掘った。その井戸は釣瓶縄の長さ二丈余（約七メートル）におよび、後に「三十貫井戸」と呼ばれ、豊かな清水をたたえて長く使用された。」

また、雲水時代の逸話と思われる話も残されている。

「ある年の夏、湖辺を行脚していたときに、暑さに耐えかねた仲間が衣服を脱いで湖水に飛び込んだが、悟溪だけは

身体をぬぐうにとどめて「徳分を児孫に残そう」と言つたという。そのために悟溪の流れをくむ東海派の寺院では、水道の無い時代にも水に不自由しなうと言ひ伝えられた。」

この話がそれである。この二つの逸話に共通することは、大麥水を大切にしたことである。

瑞泉寺において黙々と悟後の修行に勤めていた悟溪は、やがて強力な後援者を得ることとなる。美濃の豪族斎藤利藤（妙椿居士）が主君である土岐成頼の菩提のために金華山下（現在の岐阜市）に金宝山瑞龍寺を創建して初代開山として悟溪を迎えたのである。悟溪は応仁二年（一四六八）新築の瑞龍寺に入寺開堂し、師である雪江に勧請開山の称号を贈った。応仁の乱の戦火で妙心寺の堂舎が全焼した翌年のことである。美濃豪族の根拠地にこの大伽藍が出現して悟溪が開山に迎えられたことは、雪江にとつても力強い限りであつたと思われる。

文明元年（一四六九）に悟溪は、大久地城主織田遠江守広近の特請を受けて尾張余野の徳林寺に開山として迎えられた。悟溪は法嗣の一人である寿岳宗彰を創建開山として徳林寺を継承させ、自らは瑞龍寺に帰った。

瑞龍寺は文明三年（一四七一）三月に後土御門天皇から「十刹」に准ずる綸旨を下賜されて中央から公認された。この年、悟溪は五十六歳で京都の大徳寺に入寺し、さらに文明十二年（一四八〇）六月二十一日、勅命によつて大徳寺で再住式を行い、禪界におけるその名声は不動のものとなった。なお、勅命による再住というのは、これが最初の事である。住山三日の後悟溪は、

「錫を秋風に飛ばして帰り去るに好し、

千峰翠を銷す一茅庵」

の法語を残して大徳寺を退山し、同年十二月十三日に瑞泉寺に入寺した。

文明十六年（一四八四）四月十五日には、妙心寺に入寺し、この年に雪江より天授院の旧地に隣接する一隅の土地を与えられている。この土地が後に東海庵創建の地となる。文明十八年（一四八六）六月二日に師であつた雪江が示寂し、

天授院を付属された。

長享元年（二四八七）に瑞龍僧堂の新築落成をし、その後再び瑞泉寺に入寺した。悟溪はその後しばらく瑞泉寺に住寺した後、再び瑞龍寺に帰り山内に済北院を開いた。

明応六年（一四九七）五月二十四日に、後土御門天皇から「大興心宗禅師」という称号を下賜された。時に悟溪八十二歳のことであった。なお、生前に禅師号を贈られたのはこの時が始めてである。

後土御門院特賜徽號勅書

勅山擎金寶、日耀紫鳳、印泥地、生鉢華、寺感青龍瑞世、宗頓和尚胡家舊俗、西天比丘、佛病祖病俱瘥、正眼既徹、人見我見忽斷、吹毛還磨、玄要發明、吐關山山頭月、的派無聲、吸雪江江左波、再辭城北上方、竟卜岐陽巨利、宗風不遠禁闕達聽、

特賜大興心宗禅師

明應六年五月二十四日

明応九年（二五〇〇）九月六日、悟溪は瑞龍寺山内の済北院において八十五年の生涯を静かに終えている。また悟溪は、示寂後の天保年間（一八三〇～一八四三）に佛徳廣通國師の勅號を賜っている。

悟溪の示寂後二百五十年を記念して生前残された数々の法語がまとめられ法語集「虎穴録」上下二巻となっている。

◎悟溪の法嗣について

悟溪は法嗣にも恵まれていた。ここにその法嗣を各小門派の法源地名と共に列記する。

天縦宗受（岐阜県本巣郡糸貫町 慈雲寺）

西川宗洵（岐阜県揖斐郡池田町 龍徳寺）

仁済宗恕（岐阜県美濃加茂市 瑞林寺）

玉浦宗珉（岐阜市山県北野 大智寺）

寿岳宗彭（愛知県丹羽郡大口町 徳林寺）

鏡隠宗賛（患聾の為絶法）

瑞翁宗緒（岐阜市栗野 大龍寺）

独秀乾才（岐阜市長良 崇福寺）

興宗宗松（岐阜市岐陽 大宝寺）

以上を悟溪下の八哲（鏡隠を除く）といい、瑞龍寺を中心として濃尾地方の各地に小門派となって法脈を拡大していき、この地方における妙心寺派の地盤を確立したのである。

## （二）創建開山——寿岳宗彭——

徳林寺の創建開山である寿岳宗彭禅師は、前にも述べたように悟溪下の八哲の一人である。寿岳は初め悟溪の道場である瑞龍寺の山内に雲龍院を創建した。そして文明元年（一四六九）に悟溪より徳林寺を継承して当寺の創建開山となった。これにより徳林寺は、寿岳派の法源地となったのである。

寿岳は入寺する前に大徳寺に瑞世し、その法嗣には蘭室宗幡がいた。また蘭室の下には笑溪閑と友峰益の二師が出ており、この二人は共に妙心寺に瑞世している。そして寿岳の法系は今日に至るまで濃尾地方において脈々と続いて



いる。

永正二年（一五〇五）十二月十日、寿岳は徳林寺において示寂した。また寿岳は、示寂の後二百六十八年が過ぎた安永二年（一七七三）十月六日に「佛通清鑑禅師」の勅號を受けている。

今回寿岳宗彰禅師について調べるにあたり参考とした資料の中に誤りが発見されたので、ここに指摘しておく。

一・妙心寺史 下巻 一三五ページ

一・増補 妙心寺史 四六九ページ

この二冊は同文であるが、その中で

『壽嶽（宗彰）は尾張小口妙徳寺の開山で、同寺は此の一派の法源地である。』

とあるが、これは誤りであり、寿岳は徳林寺の開山で、徳林寺が寿岳派の法源地である。また「妙心寺六百年史」の一九七ページにも誤りがある。

『壽嶽宗彰禅師は、先師悟溪の道場たる瑞龍寺の塔中に龍雲院を創し、後尾張の妙徳寺の開山となれり。（次の行中ごろ）

師は大徳寺に瑞世し、その法嗣に蘭堂ありたり。』

とあるが、寿岳が瑞龍寺塔頭に創った寺は龍雲院ではなく「雲龍院」であり、妙徳寺の開山ではなく徳林寺の開山である。また、寿岳の法嗣は蘭堂ではなく「蘭室」である。

これらの誤りの中で一番多かったのが、妙徳寺の開山となったというものであったが、私の考えるところ、妙徳寺の開山「大岳宗喜」と寿岳宗彰が混同してしまったのではないかと思われる。

寿岳の法系である「臨済宗妙心寺派・東海派下寿岳門派」に属する寺院は、現在五十カ寺を数える。次にその寺院を列記するが、その所在地により寿岳門派の広がり方を読み取ることができる。

寿岳門派寺院一覧（五十音順）

秋葉寺 愛知県江南市大字宮後

阿弥陀寺 愛知県一宮市浅井町

雲龍院 岐阜市寺町

永正寺 愛知県江南市高屋町

圓通寺 愛知県一宮市奥町

覺王寺 愛知県丹羽郡扶桑町大字高雄

観音寺 愛知県江南市前野

観音寺 愛知県丹羽郡大口町大字余野

観音寺 愛知県一宮市杉山

観音寺 愛知県一宮市大字富塚イ

観音寺 愛知県尾西市開明

観音寺 岐阜県各務原市鵜沼

莞應寺 愛知県一宮市浅井町

見桃寺 岐阜県各務原市鵜沼

庚申寺 愛知県一宮市牛野通

西蓮寺 愛知県葉栗郡木曾川町

地藏寺 愛知県江南市山尻町

地蔵寺	愛知県丹羽郡扶桑町大字高木
釋迦寺	愛知県葉栗郡木曾川町
正覺寺	愛知県丹羽郡扶桑町大字斎藤
少林寺	愛知県一宮市神山
松林寺	岐阜県揖斐郡揖斐川町
淨慶寺	愛知県尾西市開明
常蓮寺	愛知県江南市大字宮後字砂場
眞光寺	愛知県一宮市大江
仙林寺	愛知県丹羽郡扶桑町大字高雄
全徳寺	愛知県丹羽郡大口町大字余野
禪默寺	岐阜県各務原市各務西町
大安寺	岐阜県各務原市鵜沼
大雲寺	岐阜県関市迫間
大王寺	愛知県一宮市浅井町
大善寺	愛知県江南市大字草井
徳林寺	愛知県丹羽郡大口町大字余野
東林寺	愛知県一宮市島村
東漸寺	愛知県丹羽郡扶桑町大字山那
桃林寺	岐阜県各務原市前渡東町

白雲寺 愛知県丹羽郡扶桑町大字高雄

普門寺 愛知県一宮市大字光明寺

文永寺 愛知県江南市大字小仏

寶珠寺 愛知県一宮市北神明町

妙光寺 愛知県一宮市笹野

妙智寺 愛知県丹羽郡大口町大字河北

妙徳寺 愛知県丹羽郡大口町大字小口

無染寺 岐阜県各務原市蘇原寺島町

薬王寺 岐阜県各務原市各務おがせ町

薬師寺 愛知県丹羽郡扶桑町大字小湊

薬師寺 岐阜県関市迫間

陽徳寺 岐阜県各務原市蘇原伊吹町

璃光寺 愛知県一宮市田所

龍泉寺 愛知県丹羽郡扶桑町大字山那

以上

## 第二節 徳林寺の開基

徳林寺の開基である織田遠江守広近公は、尾張稲沢の下津城主であった織田郷広公の次男として生れた。

織田氏は平家の出身であり、代々越前国織田庄の神官で、管領斯波氏に仕えていた。斯波氏が尾張国の守護となつたのに伴つてその名代（守護代）となり、尾張に移り住んだ。応永七年（一四〇〇）には織田郷広公が稲沢は下津の地に城を築くまでに至り、しだいにその勢力を固めていった。

郷広には、敏広・広近・敏定の三人の子供があり、長男の敏広の為に岩倉城を築き尾張上四郡（丹羽・葉栗・中島・春日井）を統治させ、三男の敏定を清洲城において尾張下四郡（海東・海西・愛知・知多）を統治させた。そして次男の広近には、丹羽郡稲木庄小口の地に城を築かせて信州・美濃に備えさせた。

広近は早くから父（郷広）の代理として京都の斯波氏のもとに赴いて、各地を転戦していた。特に遠江（現在の静岡県）における広近の功績は大きく、「遠江守」の受領もそれゆえであった。戦国における弱肉強食・骨肉相喰う時代の中にあつて、実力と人間的教養の高さにおいて一族中群を抜いていた広近に、父郷広は尾張織田家の支えとなることを期待していたと想われる。

長祿三年（一四五九）大久地城（箭筈城とも言った）は完成し、翌年の寛正元年（一四六〇）に広近は入城した。この城の広さは、東西五十七間（約一〇二メートル）、南北六十間（約一〇九メートル）で、その周りに二重の掘りをめぐら、城の西南には五メートル余の高さの土塁に櫓を構えていた。また城外には十二の町名を持つ城下町と侍屋敷を持ち家老をはじめ家士の数も多く、かなりの格式を持つ雄城であったと言われる。

広近はまた仏門に帰依厚く、剃髪をして禅によって心を修め「珍嶽常宝」という僧名を得ている。大久地城にも城廓の守護神として三体の薬師如来を奉っていた。なおこの薬師如来は廃城の折、一体は妙徳寺へ、一体は上小口の薬師堂へ、もう一体は野田野の薬師堂へ安置され、今日もなお地元の人々に信仰されている。

文明元年（一四六九）広近は、衰退していた徳蓮寺を再興し、大龍山徳林寺と改称して美濃岐阜の瑞龍寺より悟溪宗頓禪師を開山として招いた。そして広近は自ら徳林寺の檀徒となり、毎年香花料として永楽錢三十貫文を寄進したと言われている。また広近はこの年に、美濃と尾張の国境である大山に木下城を築いて移り住み、美濃の進攻に構えを強化したのであった。この木下城と大久地城を往来した道を「織田街道」といい、現在もその名前が残っている。

こうした広近の功績によって広近の現世中には、京都における応仁の乱に弟の敏定が参加したぐらいで、尾北地方は一応平穏であった。また、同族の争いが織田家の中でも燃え上がりだしていたが、これについても広近の力によって僅かに抑えられていたといえる。文明七年（一四七五）再び大久地城に帰った広近は、城の西北に邸宅を造り「万好軒」と名付けて自らの隠居地とした。延徳三年（一四九一）九月二十四日、広近はこの地において生涯を終えた。明応元年（一四九二）に織田伊勢守敏定が、広近の遺命によって万好軒を禅刹とし、「吉祥山妙徳寺」と改称した。なお現在の妙徳寺の庫裡は万好軒の遺物といわれているが、その大部分は改築されている。広近の墓もこの妙徳寺にあり、その墓には「宝篋印塔」が建てられている。この塔は、四角な平面を持ち、笠の四隅に飾りを付け、屋根は何段かに作り出し、頂上に相輪を立てた立派な石塔である。（現在相輪は、塔の横に別で置かれている）

徳林寺に安置されている広近の位牌についてここに記しておく。

（表面） 當寺開基前遠州刺史本住院殿

珍嶽常實大禪門

（裏面） 延徳三辛亥年九月念四日卒

織田遠江守廣近公者郷廣公之仲子也

前の節で紹介した、悟溪禪師の「虎穴録」の中に広近（珍嶽）を讃えた偈が残されている。

この節を終える前に広近の築城した大久地城について、もう少し記しておきたいと思う。広近が文明元年（一四六

九に大山の木下城に移った後、大久地城は広近の子である織田常任我引き継ぎ、以後子孫同族が城主となって約百年間保城した。しかし永祿七年（一五六四）織田信長が生駒氏らと共に大久地城を攻め、ついには落城に至っている。その後この地に再び城が建つことは無く、現在では大口町中小口の大口北小学校の西に、小口城跡としてその跡を僅かに残すだけとなっている。

### 第三章 徳林寺の伝説

徳林寺には創建の由緒として「山姥物語」という話が伝えられている。この伝説は、徳林寺のある大口町はもとより尾張地方に広く知られており、今日もなお人々の間で語り継がれている。

山姥物語を記した古書には「魁物語実記」や「入鹿物語」など別名のものもあるが、内容的には非常によく似ている。

ここでは山姥物語全編を短縮し、現代文に意識したうえで記することにします。

#### 『徳林寺縁起 山姥物語』

今から七百年ほど昔、大山の南羽黒の里に福富新蔵国平という武士がおりました。生まれつき剛勇で武技に優れ特に弓矢の技に秀でていました。

文永九年（一二七二）八月十五日の夜のこと、新蔵は二匹の犬を連れて尾張富士や本宮山の山や谷を歩き回り狩りをしていました。ところがこの夜に限って猪はおろか一匹の獲物も捕まえることができません。空しく傍らの岩に腰を打ち下して休息をしていますと、頂上近く登っていた二匹の犬がかけ戻ってきて恐怖にぶるぶると打ち震え尾を垂れて新蔵の裾にまつわって離れようとしません。新蔵はこの様子を見て「はて不思議なこともあるものだ。この犬に限っ

て獅子象王といえどもさして驚くことの無い逸物であるのに、よほどの怪物が現れたに相違あるまい。よし正体を見届けてくれよう。」と頂上近くへよじ登って見ますと、頂上の社のあるほとり、梢もる月影がほのかに流れて燈明の灯が妖しい光を投げかけている庭に、身の丈一丈もあるかと思われる大女が白髪をふりみだし鉄鑿を齒にぬるのに余念がありませんでした。驚いた新蔵は、かねてから悪事をはたらき人を苦しめる山姥がこの山に住んでいると聞いていたので、これに違いあるまいと思い、五人張の弓に矢をつがえ「南無や八幡大菩薩」と心中に念じ、山姥めがけて射ちました。ねらい誤らずみごとに射とめたと思つたとたん、ごうごうと山鳴りがしだすとともに、恐ろしい風が吹き荒れて、燈明の火も山姥の姿も消えてしまい、新蔵はあまりの事に落ち着きを失い、大木のもとで夜の明けるのを待ちました。

夜が明けて拝殿に近づいて見ると、黒い血が流れ出て、その血は鞍が淵へと続いていた。血の跡をたどって行くと、大きな木も小さな木も倒れ、大きな岩も崩れ傾いていました。化け物なら矢も当たらないはずだがと考えながら一旦家に帰り、そして大勢の人を呼び集めこのことをありのままに話した。それを聞いた人々は驚いて新蔵とともに本宮山へ行き、拝殿や道に血が流れているのを見て、話が本当であることを知りました。そこで血の跡をつけていくと、安楽寺（あずくし）という里の中を通って、羽黒の南の新蔵の居所の成海という所を過ぎ、青塚の辺りから北の街道へ出て上小口の萬町が坪を過ぎて小口の里に入り、余野の里で止まっていました。

この余野の里に小池与八郎貞好という人が住んでおり、新蔵と大変親しかった。この人の家の門には格子があり、その傍らの小さな節穴まで血の跡は続いていた。血の跡をつけて来た人々は不思議に思つた。新蔵は与八郎に話すべきかどうか迷つたが決心して、人々を門前に待たせて中に入ると折よく与八郎は家にいた。さっそく今まであったことをいろいろ話し、「あなたの家に何か怪しいことはないか。」と尋ねてみると、与八郎はたいそう驚いた様子で、「別に変つたこともないが、ただ妻が明け方から気分がすぐれないと言つて寝込んでいる。」と答え、ふと気がかりになつ



て寢室を見舞うと、寢ているはずの妻の姿はなく、不思議に思つてふとんをひきのけてみると、おびただしい血が流れていました。与八郎はあまりのことにしばらくは呆然とたちつくしていましたが、やがて我にかえりあたりを見回すと、障子に生々しい血で書かれた二首の歌を見つけました。

求めなき契の末のあらはれて

ついには帰るふるさとの空

思ひあらばそれかとも見んこの里の

古池の水のあらん限りは

「求めなき思ひあらば……」与八郎は魂のぬけた人の様に呆然としてその歌を口ずさみました。彼の目からは猛然と涙が溢れ出し頬を濡らしました。夢であつてくれと心に叫びもしました。けれども夢でない証拠に生々しい血書きの歌があります。「自分の妻は化生のものだったのか。」と与八郎は大変なげきました。妻の名は「玉姫」といい、与八郎が本官山の御社へお参りに行つた帰り道に見そめた娘で、連れて帰り夫婦となつたのである。彼女と与八郎の間には「京丸」という一人の男の子がありました。この京丸は心やさしく親孝行な子でありました。

この出来事は与八郎も新蔵に話さず、新蔵もまた聞こうとしなかった。しかし誰いうともなく世間へ広がり、美濃の山奥や尾張のすみずみにまで伝わっていききました。

羽黒の里に新蔵と親しい大陽寺右京亮という人がいました。この右京亮は与八郎とも親しく、新蔵がある時本官山でのことなどを話すと、右京亮は「誠に不思議なことだ。そのほうどう思う。」と尋ねてきた。新蔵は「世の中の辻占を待つより仕方がなく、自分でも分からない。」と答えた。右京亮は与八郎に聞こうとしたが、ふびんに思いそれがないなかつた。

歳月はながれ、京丸はたくましく成長していった。しかし兼てから母の無い事を寂しく思い、父に尋ねても「お前

の幼い頃に病で果てた。」と申すのみで、親戚縁者もこのことにはふれようとしなかった。しかし世間の人々は口々に、「あれこそ山姥の子よ。」と言って噂しあった。しかし京丸は自分の母が山姥であったことを知らずにいました。尋ねても教えてくれる人はいなかった。だれもが「お前は山姥の子だ。」と言えず、知らぬことにしていた。

立派な若者となった京丸は文武両道に達した父に劣らぬ武士となり、元服して父の与八郎の名を襲名し、古池与八郎貞宗と名乗りました。(以後、長男は代々『与八郎』を名乗った。)

ある年貞宗は、羽黒の里を訪れた折、父と親交のある新蔵と右京亮の二人に母のことを尋ねたところ、兩人は顔を見合わせて思案し、やがて新蔵が「我等も詳しい事は存ぜぬが、貴殿の母上は女の鏡とも申す程の方で、その操は本宮山の峰よりも高く、その徳の深いことは鞍が渕の水よりも深く、世に隠れなき人と聞くが。」と語ったので、貞宗はハッと心を衝くものがあつたが、さりげなくふるまいやがて家に帰った。そしてこれは天の神が巡り合わせた夫婦だと信じ、父には語らずにいました。

その後、永仁二年(一二九四)八月、母の二十三回忌を勤めましたおり、父も母のことをいつまでも隠しておくことではないかと思案し、貞宗を傍らに呼び包む所なく語りますと、貞宗も深く心に感じ涙と共に母の菩提を弔いました。そしてこの年忌を折に、供養の為に一寺を建立したいと話しますと父も大変喜んで、幸い近くに智証法師という知行兼備の真言宗の僧が住んでいたのので之を請じて壮大な寺を建立しました。これが空母山徳蓮寺(現・徳林寺)です。

またこの寺には一つの不思議なことがあります。年忌や法会を催す毎に、どこからともなく一人の僧がやってきて之に参じ、また知らぬ間に何処へともなく立ち去って行くのでした。居所や、なぜ供養して下さるのかと尋ねても、ただ笑っているばかりで答えようとしませんでした。そして後にはこの僧の来るのを待って読経を始めたということです。

この山姥物語には、山姥という化物が出てくる反面、福富新蔵や小池与八郎の子孫が現存しているという、空想と現実の二面性を持っているといえ、大変興味深い。

現在徳林寺に所蔵されている山姥物語ゆかりの品は次の三点がある。

一、山姥の想像画一軸

一、山姥の位牌

一、福富新蔵の弓矢

#### 第四章 徳林寺の建造物

現在の徳林寺は大きくみて九つの建造物によって構成されている。それぞれ建造された時代はさまざまで、室町時代から平成までと幅広いものである。

##### 「中門」

文明七年（一四七五）九月に大久地城主織田広近により建立されたもので、一間半に一間の大きさの切妻造り瓦葺きであり、室町時代の建築様式をうかがい知ることが出来るものである。この中門には古方丈とともに、明治二十二年（一八八九）六月に、内務省より古代建造物保存金として金壹百円が下賜されている。また、明治二十五年（一八九二）七月三十日に修繕した際、中門棟木に合輪した木の裏に「文明七末年九月建之本坊」と記されているものが発見されている。

##### 「山門」

徳林寺の山門は、明治九年（一八七六）に犬山城【天文六年（一五三七）築城・国宝】の第一黒門であったものを金

二十三円で購入し、檀信徒の奉仕によって移築されたものである。城郭建築特有の門で、初期城門の薬医門形式を残している。なお現在の犬山城には、黒門の台石のみ残されており、第一黒門跡とされている。

「庫裡」

徳林寺の庫裡は、明治七年（一八七四）に犬山城主成瀬公の所有する武者所であった瑞泉寺山内臨溪院の庫裡を金三百九十円で購入し移築したものの。

「本堂」

明治十三年（一八八〇）に当山九世龍源和尚が再建したものの。

「書院」

大正時代に当山十世浩道和尚によって建立されたもの。正確な建立年月日は確認できず。

「古方丈」

徳林寺の古方丈は、当山の建造物の中で最古のものである。文明元年（二四六九）に織田広近が徳林寺を再興した時に再建されたもので、幾度かの改築を経て現在に至っている。位置としては丁度徳林寺の中心、山門と中門のつきあたりにあたる。また、庫裡と本堂をむすぶ渡りの役目も果たしている。

「鐘楼」

昭和三十四年（一九五九）九月の伊勢湾台風で前の鐘楼が倒壊したため、昭和三十九年（一九六四）に再建されたもの。なお、梵鐘は戦後昭和二十三年（一九四八）に再鋳されたものである。

「位牌堂兼開山堂」

平成六年（一九九四）に創建開山寿岳宗彰禅師五百年遠諱を記念して再建されたもの。開山堂には、勸請開山悟溪宗頓禅師・創建開山寿岳宗彰禅師・妙心寺開山無相大師の三師の像が安置されている。

「経蔵堂」

位牌堂と同じく平成六年に新築されたもの。一切経が納められている。

参考文献・資料

(地方誌)

○大口町史

編集・大口町史編集委員会

発行・愛知県丹羽郡大口町役場

昭和五十七年二月発行

○大口村史

著作兼発行者・野田正昇

発行所・大口村役場

昭和十年八月十五日発行

○郷土大口

編集者 発行所・大口町教育委員会

昭和四十二年四月一日発行

○江南市史

資料一 宗教編  
編集・江南市史編集委員会

発行・江南市

昭和五十年十一月二十八日発行

○梶原内羽黒七人衆と山姥物語

著者・吉野 守

発行者・梶原内吉野会

平成元年十月四日発行

(仏教書)

○妙心寺―六百五十年の歩み

著者・木村静雄

発行者・妙心寺大法会事務局

昭和五十九年四月十五日発行

○妙心寺六百年史

発行者・妙心寺開創六百年記念 雪江禅師四百五十年遠諱大法會局

昭和十年四月十日発行

○増補 妙心寺史

著者・川上孤山 補述者・荻須純道

発行者・田中周二

発行者・株式会社 思文閣

昭和五十年四月五日発行

○妙心寺史 下巻

著者・川上孤山

発行者・妙心寺派教務本所

大正十年十二月二十日発行

○昭和改訂 正法山妙心禪寺宗派圖

編纂者・妙心寺派宗務本所總務部

発行所・妙心寺派宗務本所

昭和五十二年三月十二日発行

○全国寺院名鑑 中部篇

編集 発行・全日本仏教会

寺院名鑑刊行会

昭和四十四年三月一日発行

(その他)

○大龍山徳林寺過去帳

○位牌

○石塔

以上